

住民の想い

続いて、芹町在住の森勇次郎さんが「築170年以上の登録有形文化財の古民家に住んでいる。古民家は維持管理が大変で修理に費用がかさむ。何度も取り壊して駐車場にしようと考えたが、潰したら二度と取り戻せない。両親の生前の気持ちも汲んで何とか維持してきたので、選定は本当にうれしい」、「芹町も、昔は酒屋、ガラス販売店、八百屋、自転車屋、たばこ屋、床屋、仏壇店などがあつた。旧石橋家も、60年前は庭に松の盆栽が百鉢以上ある素晴らしい家だった。それがいつしか空き家になり、改築され、更地になって、昔の姿を残すのは数えるほどになってしまった」、「戦後すぐに『青い山脈』という映画が作られ、芹町もロケ地になった。それを見ると木造で味のある家が多くあり、当時の景観にも良いところがあると感じる」、「住人として、特に不安を感じるのは耐震性である。伝統的な民家の良いところもあり、経験を踏まえて、地域の建造物をよりよく守っていけるよう、微力ではあるが尽力したい」と述べられました。

河原町在住の力石寛治さんは、「空き家だった寺子屋力石の再出発は、商店街が貸してくれと言ってきたことに始まり、NPOの彦根景観フォーラム、滋賀大学、滋賀県立大学など多くの人が参加してくれ、火事の後の再生にも尽力してくれた。本当に建物が残って良かったと思っている。金堂の取り組みは素晴らしいので、お手本にして頑張りたい」と述べられました。

耐震まちづくりの促進

次に彦根市教育委員会文化財課の深谷寛さんは、「行政だけでまちづくりができるわけではなく、まちの人々がどのように思っておられるかをくみ上げたうえで、どのような制度を使って想いを生かしていくかを考えることが重要だと学んだ」と述べられ、「今後、保存修理や管理を進めるには、建築基準法の制限緩和が必要であり、調査して緩和条例を作っていきたい」とされました。これに関連して、柴田さんは、「住宅

の耐震対策は、費用がかかる反面、目に見えるメリットが少ないので進まなかった。

伝建地区では外壁とともに建物の構造、躯体にも補助が出るので、まちの耐震防災対策が促進されるという感慨がある。法的規制をクリアしながら耐震、防災の知恵を出していきたい」と述べられました。

最後に、文化庁調査官の下間久美子さんが、「東日本大震災であらゆるものが失われた中で、写真1枚、神社1棟の復元がどれだけ人を勇気づけるかを身近で見てきた。個人のレベルでも地域のレベルでも、みんなで思い出を共有してまちをつくっていくことこそアイデンティティにつながる。皆さんは十分その素地をもっている。」と応援メッセージを送られ、終了しました。

格子戸アートを楽しむ

この後、寺子屋力石のギャラリー活動の紹介、尺八による「荒城の月」の献曲があり、いい雰囲気の中にシンポジウムを終了しました。さらに、参加者は、地元商店街によるふるまいと、道端にキャンドルを並べ、ライトアップされた甲冑や着物、屏風などを格子戸越しに鑑賞する「格子戸アート展」を楽しみ、重伝建地区への選定をお祝いしました。



NPO法人 彦根景観フォーラムのご案内

彦根景観フォーラムは、まちの景観づくりを楽しむNPOです。大学教員、建築家、市民、商店主、公務員などが集まり、知恵と力を合わせて活動しています。様々な情報を事務局までお寄せ下さい。

●ブログ <http://hikone-keikan.seesaa.net/>

●定例会 毎月第3金曜日 午後7時～9時 滋賀大学陵水会館 誰でも自由に参加できます。

●お問合せ：彦根景観フォーラム事務局 TEL 080-1416-5968 FAX 0749-27-1431

E-mail: hikonekeikan@hotmail.com まで



きらっと彦根 vol.47

彦根の魅力 ★ 再発見

彦根まちづくり誌 2017年3月1日 通巻47号 編集/発行 NPO 法人 彦根景観フォーラム

多賀里の駅一圓屋敷の集い96 2月4日(土)

地域の資源は宝物

山田周生(しゅうせい)さん(一般社団法人ユナイテッドグリーン代表・フォトジャーナリスト・写真家)は、2008年ガソリンなどの化石燃料を一切使わず、廃食用油などで作るバイオディーゼル燃料の生成装置を積んだ自動車で世界一周4万8000キロを走破されました。今回は、バイオ燃料生成装置のオーバーホールで滋賀に来られた機会をとらえ、お話を聞かせていただきました。



学生時代、将来に悩んだ山田さんは、とにかくバイクで好きなだけ走りたいとサハラ砂漠縦断に挑戦。そして、何度目かのサハラ砂漠縦断の時、タイヤが頻りにパンク、予備のチューブも底をついて、どうしようもなく、そこに2日間寝ていた。生きて帰るためには、無いものことばかりを考えていてもしょうがない、ここにあるものでなんとかしよう、と考えるに至ったが、あるのは空気と砂。砂をシャツで巻いてタイヤに詰めれば走れるのでは!と思



いいたった時、車が通りかかって助かったという。それ以来、極限状態での人の

能力に関心をもち、過酷なレースや極地の取材を続けているうちに地球環境の異変に気づき、現在は東日本大震災の被災地で自然再生エネルギーを基本とした持続可能な地域づくりプロジェクトの実証活動をされています。

砂漠や極地を経験してきた山田さんは、「日本のどこにも宝物がいっぱいある。しかし、そこに住む人は、無いものことばかり考え、あるものを生かそうとしない。宝物は足元にあると伝えたい」と話されました。

農家レストランの昼食は、里芋コロッケ、粕汁、ほうれん草のお浸し、水菜サラダ、赤米ご



はん、ニンジンの寒天。里芋コロッケの粘りのある豊かな食感は、まさに宝物でした。

足軽辻番所サロン「芹橋生活」

彦根藩士と地域社会

～郷土 山本半左衛門家を中心に～

講師：母利 美和 京都女子大学教授

日時：3月12日(日) 10:30～12:00

彦根景観フォーラム会員でもある母利先生は、足軽や下級武士の研究で、私たちに足軽組屋敷という貴重な歴史資源のもつ多くの物語を教えてくださいました。今回は、彦根藩と郡山領、仙台領が入り組む八日市の今堀に住んだ郷土 山本家の苦悩についてお話しくさいます。お楽しみに。

特集2：彦根市河原町芹町伝統的建造物群保存地区

重伝建選定記念シンポジウム 重伝建とまちづくりを考える